
東方の神拳

先駆ミヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方の神拳

【Zコード】

Z3376P

【作者名】

先駆ミヤマ

【あらすじ】

戦いの後に戦士たちは「この道を歩み始める。一人は正々堂々と戦い続けることを選んだ。ドモン・カッシュ。彼は拳を振るい続ける。今彼はかつての師匠と同じように悩みながら…それでも拳を振るい続ける。

(前書き)

この物語にはオリジナル要素が入っています。これは現在編集中の長編の設定を踏まえたものです。初めての投稿で、あり得ないほどの駄文だと思いますがぜひ読んでください。

コロニー・スペース群の一つ。ネオ・アース。しかしそこは宇宙世纪0087に完全崩壊した。人々は他のコロニーに逃げるも、デビルガンダムの攻撃でデスバットに襲われ多くの人々が死んだ。死体はDG細胞で配下にされていった。これはデビルガンダムと『人の闇』に立ち向かい勝利した戦士のその後の物語である。

ドモンはボクシングの大会に参加していた。彼の気合いの一発が勝負を決めた。

「アキラ」

ノイズ

「同書一欽頃、」

「K.O.!-!ドモン選手これでチャンピオン防衛20回成功です
!次は……」称賛する観客の中ドモンの表情は僅かに固かつた。

「お疲れドモン。」

- 8 -

「どうしたの？ そんなに顔をかたくして。」

トモンは口元を僅かに動かした

聞き取ることは出来ない。

「……むなし！」

「分からぬ。」

分からぬ。

「分かんなー。」

沈黙が部屋を満たす。その時戸がノックされる。

「どうぞ！」

レインが応える。扉の向こうにシユバルツ…キヨウジ・カッシュが立っていた。

「兄さん！？」

その人物に驚いたのはドモンだった。

「テレビで見ていたよ。20回防衛おめでとつ。」

「…用件は何？そのために来た訳ではないだろ？…」

キヨウジは少し苦笑する。

「マスター・アジアから手紙をもらつてね。お前が13回の防衛のとき偶然テレビに写るお前を見たらしい。」

「ドモン…」

「……」

二人は顔を曇らせる。13回目の防衛はこの20回の中で一回だけダウンをとられた試合だった。

「これだ。読むといい。」

ドモンへ

わしはみてあつたぞ。あのよくな者に負けるとは情けない…この馬

鹿弟子がああ…！

「兄さん…これだけ？」

「さあ…ただマスター・アジアは言つていた。『見えるものだけが全てではない。分かりきつたことにも落とし穴がある。』と。」

その時ドモンは端に拇指を見つけた。それを見た瞬間何かを感じた。

「分かつたよ…兄さん。俺より先に師匠にあつたら礼を伝えてくれ。」

「分かつた。後レインさんにも。」

「私に？」

「ドモンは見ないほうがいい。」

「？？？何で？」

「それがお前のためだ。」

「？？？」

まるで分からぬといふかのように首を傾げる。

「キョウジさん。マスターにあつたら私からもお礼を伝えておいてください。」

キョウジはにこにこ笑つた。そつにレインの顔は若干赤かった。

「じゃあな。」

「レイン、ここに待つてくれ。俺は兄さんを送つてくれる。」

「分かったわ。」

キョウジは移動中マスクをかぶる。その時キョウジ・カッシュはシユバルツ・ブルーダーに戻るのである。

「兄さん…俺はむなしかつた。あの戦い以降俺はただ戦うことしか出来ず、ボクシング、プロレス…格闘技ならなんでもやつた。だが他に能が無い俺にとってこれが唯一の道だった。この道が好きだから。少し前まで影がさしていた。『本当にこの道でいいのか。別の道だつて残つているんじやないか…』つて。でもようやく今日ここで分かつた。俺の格闘家として…ガンダムファイターだった自分の魂が叫んでる。師匠がその血をもつて教えてくれたんだ。」

「…ドモン。」

「兄さん？」

シユバルツは急に立ち止まると懐から手紙を出した。

「マスターアジアは己の迷いが断ち切れたようならこれを渡せと言つていた。…今こそその時だろ？。」

「ドモンよ

シユバルツには頼んでおいた。お前が闘つているときずっと迷つてゐるよに思えた。お前を見たのは防衛戦13回目の物だが、あの試合は最初から最後まで気が抜けておつた。わしにはそう感じた。

ドモン。これからもお前は迷い悩むだろ。だからこそ全てを受け入れろ。そしてどうしても越えられない壁は仲間と共に越えてこい。己だけで越えること。仲間と共に越えること。これまでの戦いでお前が真に理解しているとわしは信じておる。

行けドモン！

東方

は赤く燃えておるー

東方不敗

「…師匠…！…」

ドモンは読み終えると手紙をしまいショバルツを見た。

「じゃあなドモン。」

「まだどこかで会おう兄さん。」

「テレビの向こうで応援しているよ。」

それだけ言い残すと風のよみで去つた。

それ以降ドモンは一度だけチボテーと戦つた。

「ヘイー！ドモン！まさかここに殴り込みに来るのは思わなかつたぜ！」

「チボテー。俺は格闘家としてここに殴り込んだ。俺とファイトしろー！」

「OK！そのツケきつちつ払つてもらつぜー！」

「行ぐぞ！…チボテー！」

その結果はまさかの引き分け。その戦いを見た者はガンダムファイトの再来と語つた。しかしこれを最後にドモンがボクシングのリングにあがることは無かつた。

今、彼は多くの格闘家に挑み続けてファンを喜ばせてくる。そして彼らに『東方の神拳』と呼ばれるのであった。

(後書き)

どうだったでしょうか？感想や問題点を送っていただければ恐縮です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3376p/>

東方の神拳

2010年12月18日20時33分発行